



僕の地元、淡路島のおじが亡くなった。

おじは、長女である僕の母より10歳若い末の妹の夫で、数年前に自営業の店を畳んだ後は、畑で野菜を作ったりしてのんびり過ごしていた。おじは僕に会うといつも決まってニコニコ笑いながら「よお～～、拓也君、元気にしとったかあ～」と、高目のキーで声を掛けてきた。アルコールはとても弱く、ビール一杯で顔は真っ赤になった。朝早くから夜遅くまで自宅や現場で仕事をして、1年に1回、遠方への家族旅行に出かけたり、畑で野菜を作ったりするのが、おじの楽しみだった。おじ夫婦には娘と息子の2人の子供がいた。おじたちの家族旅行に、僕や3つ上の僕の姉と一緒に連れて行ってくれたりもして、一番関わりの深い親戚家族だった。去年は僕や僕の両親たちと一緒に東京に旅行したし、今年の夏に淡路島に帰省した時にも一緒に食事をし、僕の前の席に座っていたおじは、やはりビール一杯で真っ赤な顔になっていた。

おじの人生で一番の辛い出来事は、恐らく、一人息子を自死で亡くしたことだ。10年以上前のある夏の日の朝早く、おじが家の玄関を開けて、庭に止めてある車の中を何気なく覗いたら、そこに自分の息子がいた。車の中で練炭を焚いて一酸化炭素中毒で亡くなっていた。おじは朝の静寂を切り裂くような響き渡る大声を上げて叫んだ。当然だろう、まだ30歳を少し超えたばかりの息子の死の第一発見者になってしまったのだから。

今年の9月10日未明、家の中で、どーんと大きな音がして、おばは目を覚ました。おばが起きて見に行くと、おじが倒れていた。ほとんど意識はなく、おばは直ぐに救急車を呼んだ。救急隊がちょうど病院に到着した頃に、おじは心肺停止となった。何とか蘇生に成功したが、人工呼吸器に繋がれ、意識は戻らないままだった。くも膜下出血で倒れ、心肺停止となり、人工呼吸器で何とか生きながらえてはいたが、低酸素脳症のために脳のダメージは相当なものがあつた。蘇生するまでに20分近い時間を要したために心臓も弱っており手術はできず、非常に厳しい状況だった。たまたま、おじは倒れる数日前からコロナウィルスに感染しており、おばもその後調べたところコロナウィルス抗原反応が陽性と出た。大した症状はなかったが、コロナ陽性の人は10日間は病院に入れれないというのがその病院が独自に決めたルールだったために、おばは夫がそんな状態にもかかわらず、

病床にある夫には会えないでいた。

おばも不安だろうと思い、急遽、淡路島に帰省し、15日、おばたちの娘、孫と一緒に3人で病院に行き、ICUの面談室で主治医からの病状説明を聴き、その足でおばの家に向かい、許可を得て写真に撮らせてもらったおじのCT画像等を見せながら、僕からおばに病状説明をした。どんな姿でもいいので生きていてほしいと、涙を流しながら呟くおばの言葉は、それすらも叶わぬ願いだろう…と思いながら、ただ受け止めた。

16日、北海道に帰る飛行機の中で、しまった、と思った。病状説明をしてもらった際に、なんとかおばが面会させてもらえるようにお願いするべきだった、と後悔した。病院のホームページを探して、17日の朝早くに、次のようなメッセージを送った。「15日にX(おじの名前)の家族として面談をしていただいた者です。説明して下さった医師と看護師には大変丁寧な対応をしていただき深く感謝申し上げます。ただ、一つお願いしたいことを申し忘れました。貴院のルールとして、私のおばであるXの妻がコロナ陽性のため21日まで面会できないことになっています。ルールはそれぞれの病院で決めていいことですし、それは理解するのですが、回復してまたよくなっていくであろう患者と何時急変してもおかしくない患者を同じに扱うのはどうなのかな、と思っています。Xの場合、21日まで生命が持たない可能性が相当に高いです。ルールだからといって一律に当てはめるのではなく、個別のケースに応じて対応するのが“心ある医療”ではないでしょうか?もし感染が心配なのであれば、防護服をしっかりと着せて面会させればいいことです。一度でも会えたなら、全然気持ちが変わると思うんです。何卒ご検討のほど宜しくお願いいたします。私も医療者の端くれ、緩和医療指導医として終末期の患者さんと家族によく接する立場として、そんな風に思いました。」

僕がこのメッセージを送った数時間後に、病院からおばに、「大変申し訳ございませんでした。今日、どうぞ会いにいらしてください」との電話がかかってきて、おばは夫に会い、声を掛け、身体に触触ることができた。そして、その約半日後の18日午前1時半、おじは一切の苦しみから解放された。

変えられない現実の中で、取り得る最善は、かろうじて実現できたのかもしれない、とは思う。